

子どもが「自分で決める」ということ

前川良太

子どもが「自分で決めた」と胸を張る瞬間には、いつもまわりとのやりとりがあります。友だちの様子や大人の声かけ、その場の雰囲気…。そうしたものに影響を受けながら、子どもは少しづつ自分のやりたいことを形にしていきます。

たとえば給食の場面。子どもが「今日はあんまり食べたくない」と言ったとき、大人はつい「ちゃんと食べなさい」と言いたくなります。栄養のこと、食べる習慣、片付けの時間…大人の頭にはいろんな思いが浮かびます。それでも、そこで「じゃあ一口だけ食べてみる?」「どの野菜なら食べられそう?」と問い合わせ返すことで、子どもは自分の体と気持ちを考えながら決めることができます。大人にとっては「これでいいのかな」と不安を抱えながらの選択ですが、子どもが自分で決めた一口を食べきったとき、「待ってよかった」と思える瞬間がやってきます。

外遊びでも同じです。公園に着いて友だちが砂場に行きたい、自分は滑り台に行きたい。どちらに行くか迷ったり、いったん砂場に行ったけれどやっぱり滑り台に戻ったり…。そんな揺れ動きも自己決定の一部です。大人が「みんな一緒に砂場へ行こう」とまとめれば簡単ですが、そうせずに「別々でもいいよ」「あとで合流しようか」と声をかける。すると、最初はバラバラに見えて、その後子どもたちが呼びかけ合ったり、役割を変えて遊び直したりする姿が見えてきます。そのとき、大人は「まとめなくても大丈夫だった」と学びを得ます。

一方で、「子どもに自分で決めさせたい」と思ったとき、大人はなるべく口を出さず、黙って見守るうとすることがあります。余計な影響を与えないようにと考えるからです。でも実際には、友だちの姿や大人のまなざし、場の雰囲気など、子どもはいつも何かしらの影響を受けています。大切なのは、それらを完全に取り除くことではなく、その中で「最後は自分で決めた」と子ども自身が思えることではないでしょうか。

もちろん、自己決定とは「好き勝手にふるまうこと」ではありません。自分だけの思いを押し通すのではなく、友だちや大人との関わりの中で折り合いをつけながら選び取ることです。大人が子どもの声を尊重するのは、わがままを通すためではなく、「違いのある中でどう生きていくか」を経験してほしいからです。

哲学者のフーコーは「人は関係やルールの中で形づくられる」と言いました。子どもの「やりたい」という言葉も、友だちの視線や大人の基準に影響されています。そして私たち大人もまた、「早く片付けたい」「みんなで同じにしたい」という社会的な空気に影響を受けています。そのことに気づくと、子どもの自己決定を支えることは、大人にとっても自分自身を見直す機会になるのだと思います。

つばさでは、集団を「みんなが同じことをする場」とは考えていません。思いの違う子どもたちが集まっている、その姿そのものが集団です。だから「みんなが楽しめるもの」という安易なまとめ方には行かず、違いを抱えたままどう支え合えるかを大事にしています。

支え合うといっても「いつも仲良く助け合う」ということではありません。できる子とできない子、

やりたいことが違う子が同じ場にいる。その葛藤を避けずに受けとめながら、「じゃあどうする?」と考え続けることです。大人にとっては効率や秩序を優先したくなる場面ですが、あえて待ち、揺れを受けとめることが子どもの自己決定を支える土台になります。

私たちが大切にしているのは、「子どもが一人で決められる力」ではありません。まわりに影響を受けながらも自分の声を見つけ、その声を友だちや大人と交わしながら形にしていく力です。そのために、大人は自分の「急ぎたい気持ち」「揃えたい気持ち」とも向き合いながら、子どもの声を待ち、一緒に悩みながら歩んでいきたいと思います。 今年度も、子どもたちが「自分で決めた」と実感できる瞬間を大切にし、その過程を支え合う集団の中で育んでいきたいと思います。

全国保育団体合同研究集会 in 群馬

全国保育団体合同研究集会（合研）は、全国の保育者や研究者、保護者が集まり、子どもの育ちや保育の課題について学び合う大きな研究集会です。現地参加は約3,500人、オンライン参加は約7,000人にのぼり、毎年開催地を持ち回りで行っています。今年は猛暑の群馬県高崎市での開催でした。私はほとんど毎年のように参加していますが、先進的な実践から学ぶだけでなく、保育や子育てを取り巻く社会情勢、制度、そして平和についても、多くの仲間と学び合える大切な機会だと感じています。

今年は、つばさからは川中と谷野が昨年度の5歳児クラスの実践を全国に向けて発表しました。実は、タッチパネルの隣にある赤べこは、2年前に福島で発表した際に持ち帰ったものです。そして今年は、その横に高崎だるまが並ぶことになりました。

二人の報告は「誰もが排除されずに共に暮らし合う」という保育の本質に迫るもので、苦惱しながら迎えた当日にもかかわらず、本番では一番生き生きと語る姿がとても頼もしく感じられました。発表の詳細は、ぜひ後のページをご覧ください。ちなみにアトムからは同じく5歳児担任だった志賀と山本が発表しています。そちらに参加した鳥野の報告も読んでもらえたらと思います。

私自身も例年いろいろな講座に参加していますが、今年は講師として登壇しました。というのも実行委員長を務める大学時代の恩師から依頼をいただいたのです。講座では、つばさでの日々をもとに「職員同士がどう信頼関係をつくり、子どもの姿を中心に考えていくか」についてお話ししました。もちろん、すべてが順調にいくわけではありません。意見がぶつかり、ときに迷いながらも、それでも子どもたちにとってよりよい保育をめざす姿を、率直に報告しました。全国から集まった先生方も同じような悩みを抱えていて、「うちの園もそうだ」「一緒に頑張ろう」と励まし合う対話の場となり、私自身も仲間の存在に背中を押される時間となりました。

この夏はほかにも、島根県益田市での「人づくりフォーラム」や、市内の保育園視察研修にも参加してきました。8月前半に皆さんとお会いできなかったのは、そんな事情もあったからです。こうして得た学びを、また日々の保育や地域に少しづつ還元していきたいと思っています。